

魅惑と葛藤

壁

3 回生36代 鹿野 修三

酒もタバコも知らないウブな私の大学生活は汗と泥にまみれたキスリングとドンゴロスと夏テンと共に始まった。

人間頭ばかり使って体を使わなければ偏ってしまうと思っていたのでどんどん色々な事がしたかった。しかし、いざ合宿に入ってみると自分の力不足を痛感し、大自然との闘いというよりむしろ自分の内面との闘いになってしまう。これは相対的なものであるから上回生になるにつれ自然に克服される。

そしてある程度自信(自惚れ)がついてしまうとその時々状態に満足を覚え、しがみついてしまう。その瞬間から自分の周囲には壁ができる。壁の中では威張ってられるが、外へでて自分を試す勇気が無くなってしまう。自分の無知、無力さを知るのが嫌になるのだ。

だが無力さを知ることはくやしいが、すべき事の発見でもあるのだ。自分のこなせる範囲で行動することも大事だし、その範囲を広げていくことも大事だ。その為には絶えず壁をつくっては壊していくことを繰り返さなくては行けない。近頃上回生になるにつれ周囲にどんどん強固な壁が出来てくるから。

探検、その他について思うこと

3 回生36代 内山 土子

探検、という言葉をもっと口に出してみる。

探検ねえ、と思う。探検ねえ、どうかねえ、と思う。結構激しいな、と思う。言葉には熱いギラッとしたものを感じるような気もする。

人は私が探検部だと知ると、私が何かギラッとしているようなことに果敢に挑んでいるかのように思う(と思う)。私は今まであまりギラッとしていなかった。一つギラッとなりましようかと、思ったこともなさそうだ。しかしギラッとなる自分を空想してギラッとほくそ笑むことは半年に2度か3度か4度はある。そしてギラッとしている人を讃える。

今までギラッと書いてきたがギラッという音は少し探検とは違う雰囲気を持っているようにも思えてきた。ギラッという音じゃないような気がしてきた。

私は、探検というよりも自然が好きだ。そのまま、なーんもしてません。というのが好きで多分そういうのが好きで今までよく分からなかったけどそういうのが好きなんだな、と思う。

そしてポーンと行ってしまうのも好きなんだな、と思う。

岩壁で想う

3回生36代 花岡 潤

大学生としての4年間で、何をして過ごせば自分の為になるのだろうか。入学当時、それはやはり自分の選んだ分野（ちなみに私の場合は社会学）の研究だと思っていた。クラブ活動もしたいと考え、山岳部に籍を置いたこともあったのだが、その当時は、どんなことがあっても授業を最優先しなければならないと思っており、また金銭面の問題もあり、一ヵ月たらずで辞めてしまった。

その後、クラブ活動をするわけでもなく、バイトをして金をつくり、本を読むこと、音楽を聞くこと、映画を観ることにその全てをつぎこんでブラブラしていたのだが、人間というものは、そんな生活にそう長い間耐えられるものではない。私にとって、本・音楽・映画というのは水や空気と同様のものであり、やはりそれのみでは私自身が満足できないのであったのである。

ではそのブラブラしていた期間が全くの無駄であったかというところでもない。いい本やいい映画に数多く接することによって、いい人生を送る為の生き方をぼんやりとはあるが思い描くことになり、それと正反対の生活をしている自分自身を発見することになったのだと思う。いい本を読み、いい音楽を聴き、いい映画を観ることも人生において大切なことであると改めて思ったりしている。

今まで書いてきたようないきさつで、現時点での、私の考える“いい人生を送る為の生き方”の定義がなされた。それは“自分の持てる限りの力を出しきって自分の本当にやりたいことを

わき目などふらずに一生懸命に目標に向かってやり通す”ということである。そうすることによってのみ、自分はいいい人生を送っていると確認できるのではないだろうか。

3回生になって、私は探検部に入ったわけだが、これもやはり私の持っている人生においての目標につながるからである。大学でのクラブ活動を大学に在学している間楽しむ為のものと考えるならば、私自身3回生になってわざわざ入学式の日にガイダンスに行ったりしない。

私はいま社会学部に籍を置いているのだが、2年間講義を受けてみて、今ひとつ自分のやりたいことではないように思え、来年度は文学部への転部を考えている。そこで考古学か文化人類学をやってみようと考えており、それらの学問領域のうちでも、発掘や現地調査を主にした研究をしてみたいので、探検部の活動はそれらの研究をしていく上で何らかの助けになるのではないかと思うのである。それに加え、感性も磨くことができれば大きなプラスだと思っている。

色々並べたてたが、私が探検部のドアをノックした大きな理由がもうひとつある。それは、山に登れば、岩に登れば、川を下れば、普通の人には決して見つけることのできない何か大切なものがみえてくるかもしれないということである。もちろん景色が美しいから、征服欲が満たされるから、楽しいからというような気持ちもある。しかしながら、私はやはり、冒険にはならない程度の危険を伴った探検により、ある意味で“生命を研ぐ”ことによって、自分の中の奥底の、日常生活では用いられない感性が削

りだされてくることで、普通は見ることでできない（気付かないだけかもしれない）何かが見えてくると思いたい。

今年入部したばかりなので、部の歴史や、今

までの活動をテーマにはできなかったのであるが、以上のようなことを先日、岩登りに行った時にぼんやりと想った。

ゆめ

2 回生37代 藤巻 正雄

だれもないどこか遠くへ行きたい
大草原の中
地平線を見つめて
輝く太陽の陽を背にうけながら
どこまでも歩いていきたい

瞳を閉じればもうそこは中央アジア
雪が降った朝の子犬のように
僕は幸せいっぱいそこにかけまわる

もう何年も前の夢
いつになったらかなえられるのだろう
ただ過ぎてゆくだけの毎日
そんなものはもういらない
年をとって後悔する人生なんてまっぴらだ

ならば今しかない
世間の常識で固まった心に翼をつけよう
そして翼を広げて
大空にはばたこう
そこでは天使の歌声がきこえるのだ

if you have a dream you can do everything
so never give up your dream it makes you happy
and your world wonderful so never give up
stil you have a dream all you want will become true
you can do everything so never give up
never give up